

# 北海道夕張市における地域再生に寄与する観光のあり方に関する研究

## —炭鉱遺産を活用したエコミュージアムの構想—

A Study of Ecomuseum for Regional Revitalization in Yubari City

佐藤 真奈美

SATO Manami

### 1. 序論

北海道空知地方を中心とする産炭地域は、基幹産業の崩壊による地域の劇的な変容を経験した。戦後から高度経済成長期にかけ、日本の発展に多大なる貢献をしてきたが、炭鉱閉山により地域の活力は急激に低下し、著しい人口減少・高齢化など、地域崩壊の危機に直面している。

夕張市は、1890年の開鉱以降100年にわたり、日本有数の炭鉱都市であった。炭鉱末期以降は、地域再生の打開策として次々に大型観光事業を展開したが、マス・ツーリズムに依拠した観光開発は有効な手立てとはならず、2007年に財政破綻する要因の一つとなった。しかし、観光の経済・社会効果を勘案すると、単に観光を忌避するのではなく、これまで行ってきた観光政策の反省を踏まえた上で、その地域に適した規模・方法が模索されるべきである。

そこで本論文では、北海道夕張市を対象に、疲弊した地域の再生に寄与する観光のあり方を追求することを研究目的とする。財政再建団体という制約条件下での夕張市においては、地域の歴史的な脈に位置づけられる地域資源に新たな価値を見出し、住民自らが主体となり進められる観光まちづくりに、新たな観光展開の可能性を見出すことができるのではないかと考えた。そこで、その手法としてエコミュージアムに着目し、事例地域を設定して、導入に向けた障壁となる事実やその解決方法などの諸要因を明らかにし、構想の有効性を検証する。

全国で唯一の財政再建団体という、最も厳しい条件下の夕張市で導入する手法に一定の効果がみられれば、他の疲弊した地域の再生に寄与する観光のあり方に、知見を援用できるのではないかと考えた。また、夕張市が財政破綻した主たる要因は観光にあると言われる中で、対案としての観光振興策を示すことは、夕張市の閉塞した道筋を打開することに貢献できると考えた。

本論文の流れを図1に示す。

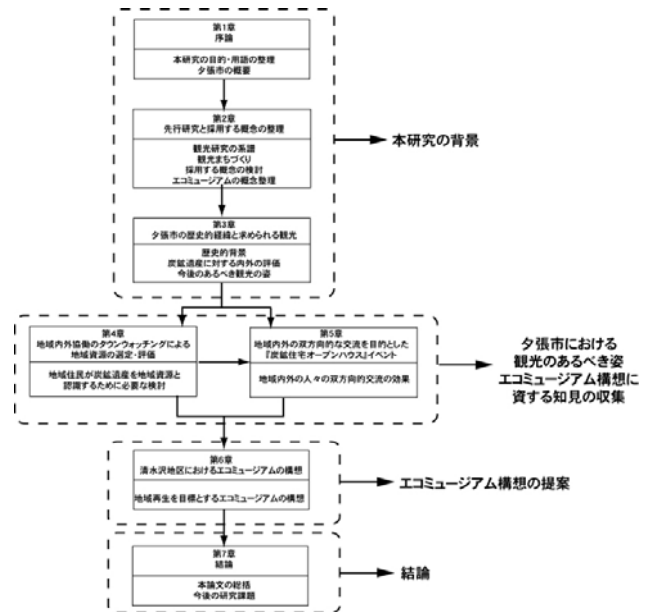


図1 本論文の流れ

### 2. 先行研究と採用する概念の整理

観光は、社会と経済の発展とともに様々な形態をとった。1960年代以降、広く一般大衆が観光に参加することが可能になったマス・ツーリズムという形態は、受け入れ側地域の社会・文化・環境にマイナスのインパクトをもたらすことが批判された。Murphy(1985)は、地域社会の積極的な関与を重視した「コミュニティ・アプローチ」を提唱し、マス・ツーリズムに代わる、オールタナティブ・ツーリズムやサステナブル・ツーリズムなどの概念に有用な示唆を与えた。現在は、このような環境・経済・社会文化のあらゆる側面における持続可能性を配慮した「新しい観光」が、観光研究の主流となっている。

「観光まちづくり」は、このような新しい観光の潮流に位置づけることができ、観光により地域の持続可能な発展を指向し、住民の生活を向上させるために取り組まれる活動の概念と言え、疲弊した地域の再生に寄与する可能性が期待できる。本論文では、観光まちづくり研究会(2000)の定義に依拠しつつも、「観光まちづくり」を、「持続可能

性に配慮した新しい観光によるまちづくり」、つまり「地域住民が主体となり、地域の資源を活かすことで、来訪者との交流を振興し、地域での生活をよりよくすることを目的とする概念」として捉える。

観光まちづくりの導入に当たっては、地域住民が主体的かつ効果的に、地域資源の価値を表現する方法を、個別の地域によって検討するべきである。

エコミュージアム<sup>1</sup>は、ある一定の地域において、自然・人間社会環境を時間的・空間的に捉える博物館である。「住民主体」「地域資源の保存・活用」「来訪者を意識」という、観光まちづくりの概念を包括的に体现するだけでなく、博物館の「研究・保存・活用」機能を備える点、地域資源の現地保存などの点が、日本有数の旧炭鉱都市という夕張市地域の特徴を最大限に表現する手法として最も有用であると考えられる。

### 3. 夕張市の歴史的経緯と求められる観光

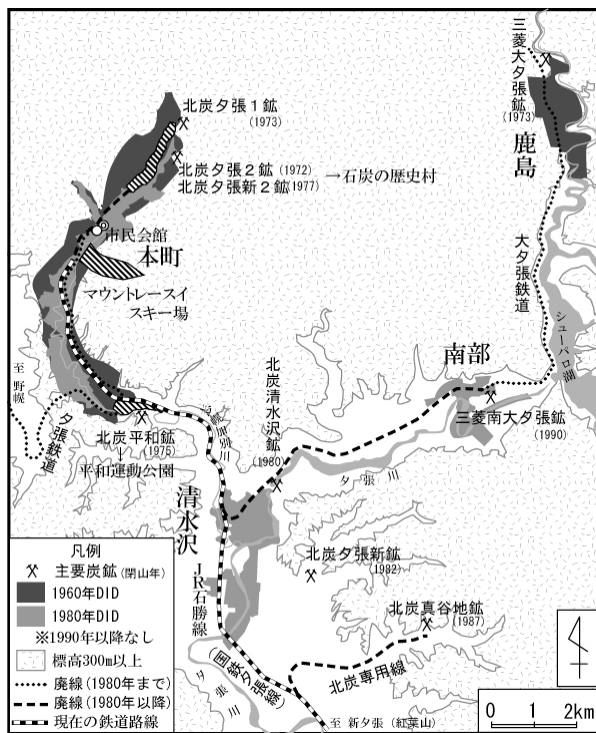


図 2 夕張市における市街地利用の変遷

出所: 佐藤・吉岡(2008)

夕張市では、1960年代の最盛期には17炭鉱が操業し、最高出炭量は4,264,227トン(1966年)を記録した。人口も1960年に107,972人に達し、日本を代表する炭鉱都市となった。しかしその後は、エネルギー革命などにより石炭産業の地位は低下した。

夕張市は1980年代、産炭地域振興臨時措置法などの

交付金を頼りに、市北部の炭鉱跡地を転用したリゾート開発や遊園地運営、映画祭の開催など、大規模観光への転換を図った(図 2)。しかし、行政主体の観光事業運営、次々と新しい施設を作り続けた事業運営手法、地域の歴史的な脈を無視した観光政策、市政運営に対する議会や市民によるガバナンス機能の欠如などの問題を包含する観光運営や、長年にわたる不適切な財務処理などが要因となり財政破綻に至った。

財政再建団体入り後、夕張市の観光施設は、民間企業や市民団体の指定管理者に運営委託された。しかし、施設型のマス・ツーリズムに依拠した観光が中心であることや、市北部地区での観光が中心であることなど、財政破綻前の観光と本質的に変化がないことが懸念される。

従って、今後の夕張市が取り組むべき新たな観光の方策は、「財政・人口規模にあった適正な規模」、「炭鉱遺産や自然・農業など地域資源の活用」、「外部の観光事業者や大型の開発に依拠せず、住民主体」などの点に配慮して進められるべきである。

近年、炭鉱遺産を活かしたまちづくりの展開可能性が注目されており、旧北海道炭礦汽船(株)(北炭)夕張炭鉱関連の7件が登録有形文化財になるなど、夕張市の炭鉱遺産は外部から高い評価を受けている。また、空知支庁の産炭地域振興政策では、夕張市は地域外に対する訴求力かつ地域内での拠点性を持つ地区として重視されている。

以上を踏まえると、夕張市のまちづくりと観光の適切な展開には、観光まちづくりの概念を包含しつつ炭鉱都市という地域の文脈を効果的に表現できる、エコミュージアムの概念の導入が適切である。しかし、地域の出自を反映した炭鉱遺産に価値を見出そうとする市民活動の動きは活発ではなく、未成熟な状態であると言える。従って、エコミュージアム構想に必要な住民主体の姿勢を醸成するには、地域住民が炭鉱遺産を地域資源と認識するための方策の検討が必要と考えた。

### 4. 地域内外協働のタウンウォッチングによる地域資源の選定・評価

夕張市が今後行うべき炭鉱遺産を活用したエコミュージアムのモデル地域として、清水沢地区<sup>2</sup>を設定する。

#### (1) 清水沢まち歩きタウンウォッチング

2008年7月6日(日)、地域内外の参加者による地域資源探しとその評価を目的とした「清水沢まち歩きタウンウォッチング」が開催された<sup>3</sup>。

参加人数は計 31 名(11 グループ)である。「写真投影法」<sup>4</sup>を採用し、グループごとにデジタルカメラ・地図を持ち、「誇れる(いいと思う)もの」を撮影しながら歩いた。有効撮影枚数は 899 枚である。後日、それぞれの地域資源に対する個人の評価を質問し、地域資源の評価要因を考察するための追加調査<sup>5</sup>を行った。

## (2) 参加者の行動と感想

参加者が歩いたルートや感想の分析から、特に《市内》グループは、普段足を踏み入れない場所に「冒険」しており、実際に歩くことで普段何気なく見ていたものが地域資源であると認識したり、近くに住んでいても未知であったものを発見したりする契機となったことが伺える。

## (3) 地域資源の特徴

参加者により撮影された写真を分析し、地域資源をどのように認識しているかを考察する。まず斎藤ら(2001)を参考に撮影対象を分類し、その結果 7 分野 36 カテゴリの地域資源を選定できた<sup>6</sup>。この地域資源の一覧を表 1 に、分布を図 3 に示した。

すべてのグループが撮影した地域資源は【52 清水沢発電所】のみであり、次いで 9 グループが撮影したのは【15 水面】【51 清水沢ダム】【54 木造炭住】【55 改良住宅群】【64 廃校】であった。

撮影枚数をみると、最も多く撮影された分野は【5 炭鉱関連】の 340 枚で、全体の 3 分の 1 以上を占めた。続いて【4 生活関連】分野が挙げられた。これは繁栄時の面影を感じることができる【46 特徴的な民家等】、【48 繁華街】など、建物や街並が撮影枚数の上位に挙げられた。

追加調査においても、【5炭鉱関連】は高く評価され、最も評価が高かったのは「清水沢発電所」(評価平均点 4.74)である。市内外問わずその威容や歴史性、産業遺産としての価値への賛嘆が多数見られた。「清水沢ダム」も同様であった。

これらのことから、評価の高かった資源は、そのほとんどが炭鉱に関連するもの、もしくは炭鉱の存在が由来となっているものと言える。

## (4) 市内外の差異

《市内》のみが撮影した資源は【34 墓地】のみである一方、《外部》のみが撮影した資源は、【21 人物】、【44 電気・水道】、【45 道路・橋・階段】、【57 旧清水沢炭鉱関連その他】、【62 廃屋】など 8 資源であった。このような「地元住民とのふれあい」や現在使用されていないものや風化・劣化・撤去済みのものなども《外部》の目には新鮮に映っていることが伺える。

表 1 地域資源の分類表

資源名	A 《市内》	B 《市外》	C 《専門家》	撮影枚数 合計	撮影枚数 順位	撮影グループ数 の合計(T=11)
1 自然	15	65	17	97		
11 山林	1	8	2	11	24	5
12 植物	2	19	5	26	13	6
13 地形	2	12	2	16	18	6
14 鳥	3		2	5	32	4
15 水面	7	26	6	39	8	9
2 人物		3	3	6		
21 人物		3	3	6	29	2
3 文化	7	21	24	52		
31 地蔵	1	3		4	34	3
32 清水沢神社	3	13	24	40	7	7
33 寺	1	5		6	29	3
34 墓地	2			2	36	1
4 生活関連	15	132	79	226		
41 公共施設	2		1	3	35	2
42 現清水沢小学校	3	4	1	8	27	5
43 IR清水沢駅	1	13	10	24	14	6
44 電気・水道		25	8	33	10	5
45 道路・橋・階段		22	10	32	11	6
46 特徴的な民家等	2	32	28	62	2	7
47 技巧を活かした生活設備	5	11	4	20	16	6
48 繁華街	1	23	14	38	9	6
49 商店・企業	1	2	3	6	29	5
5 炭鉱関連	36	213	91	340		
51 清水沢ダム	5	36	13	54	6	9
52 清水沢発電所	9	79	20	108	1	11
53 ブリ山	11	18	3	32	11	8
54 木造炭住	3	18	34	55	5	9
55 改良住宅群	7	41	13	61	3	9
56 宮前町浴場	1	2	7	10	26	5
57 旧清水沢炭鉱関連その他		19	1	20	16	4
6 遺構・廃施設	15	82	33	130		
61 観光施設遺構	6	16	2	24	14	6
62 廃屋		12	1	13	23	3
63 廃止公共施設	2	7	6	15	21	8
64 廃校	4	31	21	56	4	9
65 鉄道廃止設備	2	12		14	22	2
66 遺構・廃施設その他	1	4	3	8	28	
7 眺望	1	26	21	48		
71 清水沢繁華街眺望		2	3	5	32	3
72 清羊町・宮前町眺望	1	7	8	16	18	5
73 清陵町・南清水沢眺望		11	5	16	18	5
74 ランドマーク		6	5	11	24	6
撮影枚数の合計	89	542	268	899		
資源数の合計(T=36)	28	33	32			

撮影枚数は《市内》と《外部》で圧倒的な差があった。いずれも炭鉱関連資源を最も多く撮影しているが、2 位は《市内》では「自然」、「生活関連」、[遺構・廃施設]である一方、《外部》はどちらも[生活関連]である(表 1)。

追加調査では、[自然]分野で、《市内》の評価平均値が《市外》・《専門家》の平均値を上回った。「夕張の象徴は「自然」」など、記述量も多かった。

[生活関連]については、《市内》からは「衰退」「汚らしい」など、思い入れを感じさせる記述がほとんど見られなかった。《市外》・《専門家》は個人差があるものの、「夕張らしい廃墟の町」や「昔の喧騒が目につく」など繁栄の痕跡を評価する記述が見られた。

以上から、《市内》と《外部》間の意識は、[炭鉱関連]以外で大きく異なっており、《外部》が評価しているのは、学校跡や神社、街並みなど、炭鉱の歴史性や物語性などがあったからこそ成り立った、人々の生活に関わる資源であると言える。

## (5) 「清水沢が誇れるものベスト3」による評価

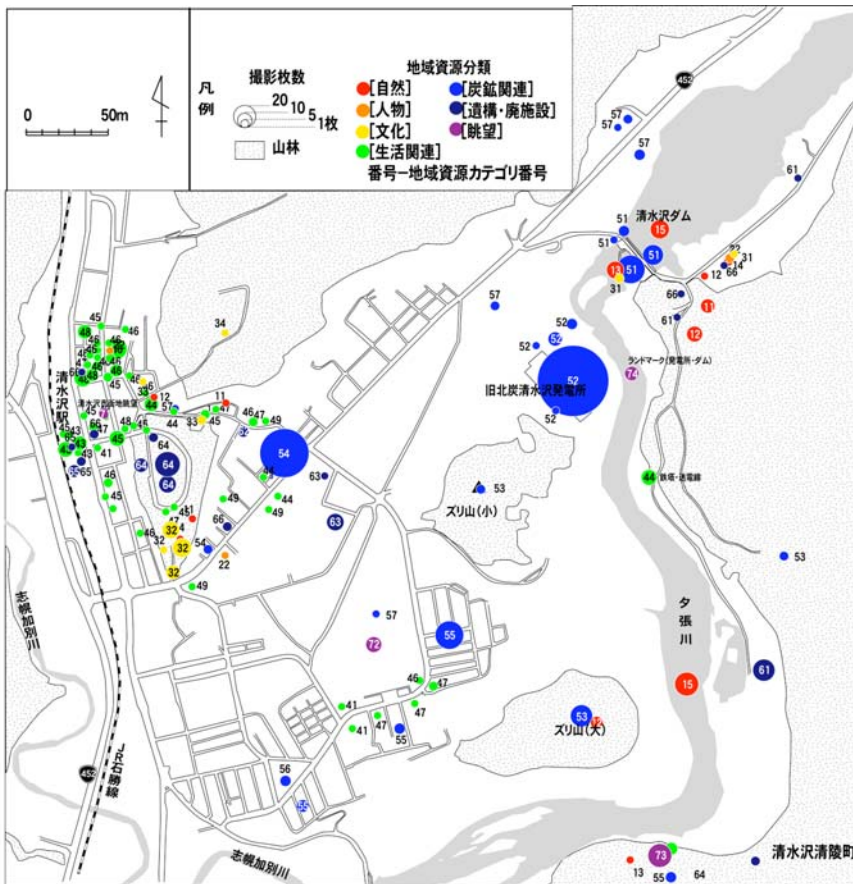


図 3 地域資源の分布図

グループごとに選定した「清水沢が誇れるものベスト3」で、最も多くのグループに評価されたのは、“ズリ山からの眺望”(9グループ)であった。選定された写真には、炭鉱住宅や発電所、清陵町などの眺望が撮影されていた。

続いて“清水沢ダム”(7グループ)は、視対象・視点場の両方として評価されており、「ダムと発電所をセットで見ることでより歴史性のある景観と感じる」という趣旨の意見があった。

地域資源を撮影した場所(視点場)の分析でも、至近距離以外はほぼズリ山・清水沢ダムであることから、この二つの恵まれた視点場の活用を、複数の要素を組み合わせることにより生まれる相乗効果などを含めて検討すべきである。

以上のことから、清水沢地区の地域資源は、炭鉱遺産を中心に認識され、《外部》は、炭鉱という地域の歴史的な文脈の中に位置づけられる、繁栄した時代の面影を残す文化・生活関連資源、地元住民とのふれあいなどにおいても、地域資源として認識していることが明らかとなった。さらに外部の視点を導入するという手法が、炭鉱遺産に関心を持つ地域内外の人々に訴求し、まちづくり活動に好ましい影響を与える可能性が指摘できたとと言える。

## 5. 地域内外の双方向的な交流を目的とした『炭鉱住宅オープンハウス』イベント

### (1) 「炭鉱住宅オープンハウス」の実施

前章のタウンウォッチングにおいて、二種類の炭鉱住宅(木造炭鉱住宅・改良住宅群)は、高い評価を受けた。現在も炭鉱を由来とする固有のコミュニティが営み続けられており、これはまさに、前章で指摘した「炭鉱という地域の歴史的な文脈の中に位置づけられる、繁栄した時代の面影を残す文化・生活関連資源、地元住民とのふれあい」の地域資源であり、外部の人々にとって魅力的な地域資源となる可能性が高い。

そこで、地域内外の双方向的な交流を深化させるため、2008年10月19日(日)、6軒の旧炭鉱住宅(うち1軒は空き家を公開し、その居住者と対話する「炭鉱住宅オープンハウス」とい

う催事が実施された<sup>7)</sup>。

### (2) 居住者の概要

平均年齢は75.6歳。居住者はいずれも北炭での勤務経験を持つ。全員が町内会・老人クラブの役員である。

### (3) D宅の状況

居住者と参加者がどのような交流をしているかを把握するため、居住者D宅にてビデオカメラ撮影を2時間行った。その内容をテキスト化し、滞在時間や発話の頻度、内容などについて分析を行った。

撮影時間中に訪れたのは、9グループ19名である。1分間あたりの発話頻度(発話総数/滞在時間)がD夫妻と同程度、すなわち主体的に会話に参加していたと判断できる発言者は、3分の1程度の6名(男性3名・女性3名)であり、炭鉱に興味を持っていたり、同種の産業に縁が深いなどの背景を持ち、ある程度炭鉱に関する知識を有している人々であった。これらの人々にとって居住者と対話を行うという今回の形態は、非常に満足いくものであったと言える。

### (4) 参加者の意識変化

参加者を対象にしたアンケート<sup>8)</sup>により、どのような意識を抱いているかについて考察する。

参加した感想として、次回「お金を払っても参加したい」と回答したのは22名(45%)であり、半数近くの人がリピーターとなる可能性を示唆している。参加費の平均希望額は1,205円であった。「1回見学すればよいと思った」と回答したのは2名(4%)のみであり、多くの参加者が、このような対話を通じた交流に意義を感じていると言える。

さらに感想に関する自由記述内容からは、人の暖かさなどコミュニティの力を評価する記述、住宅内部の見学や当時の話など貴重な体験ができたとする記述、かつての暮らしや炭鉱独自の制度など新しい知識を得ることができたとする記述などがあつた。一方で、移動手段の充実やわかりやすいマップ、ガイドによる案内などを求める記述もあつた。

次に、見学前後の清水沢地区の印象について自由記述により尋ねた。記述内容をプラスの印象と受け取れるものとマイナスの印象と受け取れるものに分類したところ、見学前にマイナス印象を抱いていた29名のうち、26名(90%)が見学後にプラスに転じた。破綻の暗いイメージや、寂れたイメージを抱いていたが、見学後には「思ったより明るかった」「人がたくさんいて温かかった」などの好印象に変化した。一方でマイナス印象のままの人は、催事の企画の不備の批判やまちの美観の問題を指摘した。

従って、本アンケートでは、居住者との対話を通じて交流を行う今回の形態は、参加者側からはおおむね好評であったと言える。

#### (5) 催事による居住者の意識変化

居住者5名の反応の変化を催事前後で比較し、催事が居住者にどのような変化をもたらしたかを、催事前・後のインタビュー調査により考察する。催事前には個人の経歴・催事についての反応・清水沢地区への思い等について、催事後には感想・清水沢地区への思い等、事前に設定した質問に基づき行った。分析方法は、西條(2007)で採用されている「構造構成的質的研究法(SCQRM)」<sup>10</sup>を参考にした。

#### 催事前

賛成の感情をプラス、反対の感情をマイナスと表現すると、参加者への感情は、当初はマイナスの感情を表に出さなかったものの、会話が進むうちに、憂慮やプライドなど、プラスマイナスゼロないしマイナスの感情レベルが表れた。

地域に対する感情は、「現在の住みよさ」と「過去へのプライド」という、相反する意識に発言者が区分された。

「現在の住みよさ」グループは、A・C・Dである。3名に

共通するのは、地域での住み心地に満足し、質素でも充実した生活を送れるという感情である。

「過去へのプライド」グループは、B・Eである。2名からは炭鉱時代の技術や過去の栄華が強調され、それを忠実かつ容易に再現し来訪者に見せることが現状では不可能であることから、ただ興味があるだけで参加することへの警鐘という旨の発言につながったと考えられる。すなわち過去に対するプライドが、2名の発言の根拠となる感情であると推測できる。

地域への感情と「参加者への感情レベル」は一致しており、感情レベルがプラスマイナスゼロの人は「現在の住みよさ」グループ(A・C・D)であり、感情レベルがマイナスの人は「過去へのプライド」グループ(B・E)である。

これらをまとめたのが、図4である。

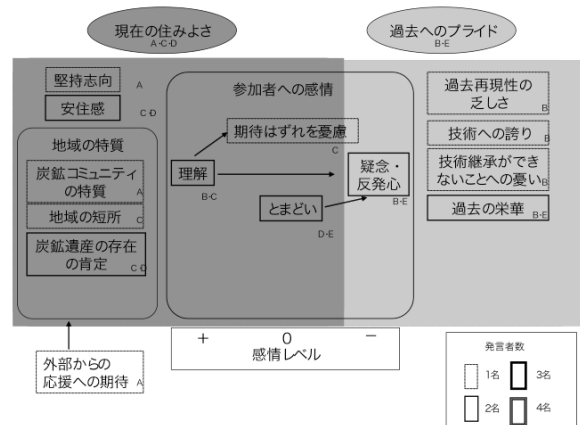


図4 催事前の居住者の反応理論モデル  
催事後

催事後の反応は、炭鉱に対する知識の有無に関わらず一生懸命に話を聞こうとする参加者との交流に、好印象を持っていた一方で、一部の目的のない参加者には一様に戸惑いを見せた。

ただしBは、催事当日、事情により時間をかけて参加者と接することができなかったため、他の居住者に比べ深い感想を持たなかった。しかし、最後に話したという若者グループとは、炭鉱の話はほとんどなかったものの、会話が盛り上がり、非常に満足していた様子であった。

このことにより、Bにおいても交流が充足したものになれば、催事への満足度も高まるのではないと言える。すなわち、濃密なコミュニケーションと参加者の主体性が、ホスト側である居住者の満足に結びつくと考えられる。

事後インタビューで新たに言及された事項は、炭鉱に関わる言及「炭鉱マンとしての誇り」「炭鉱の技術・記憶を継承したい」である。事前に言及していたのはBのみであ

ったが、事後にはBも含む4名が、それぞれの得意分野における炭鉱の記憶・炭鉱技術継承への願望・責任感に言及していた。いずれも参加者との関わりの文脈中で言及されており、参加者との交流がこのような感情を呼び起こす契機となったと言える。

また、外部への提示を意識した「地域・資源の新たな評価」「地域の発展への思い」という地域に対するプラスの感情も新たに言及された。

しかし、事前インタビューで「現在の住みよさ」グループであったA・C・Dは、生活の利便さは評価しつつも、清水沢が観光対象になることはなく、一般的な来訪者が訪れることもないという従前の考え方が変化しなかった。

一方、「過去へのプライド」グループのB・Eの2名は、少なくとも過去へのプライドを強調していた事前インタビューよりは態度を軟化させ、現在の地域価値を認識するような発言をしていた。またこの2名はいずれも、自分が貢献できる活動について言及していた。この催事が何らかの心境の変化を引き起こす契機となり、これらの発言に至った可能性はある。

これらを図 5 に整理した。

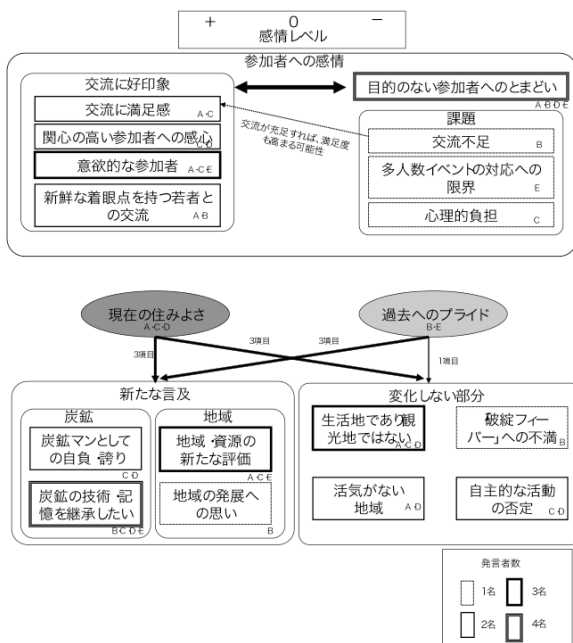


図 5 催事後の居住者の反応理論モデル

以上のことから、居住者と主体的な外部の参加者との交流が、双方に何らかの心境変化の引き金となる可能性が高く、清水沢地区の観光まちづくりにとって、好影響を与える可能性が示唆された。

しかし、来訪者が主体的に居住者と交流を行うには、炭

鉱や地域に関する基礎的な素養を持ち合わせていることが求められる。従って、教育などの機能を含有するエコミュージアムの博物館としての機能が必要とされる。

## 6. 清水沢地区におけるエコミュージアムの構想

### (1) 基本構想

#### 計画の目標

本計画では、夕張市清水沢地区において、地域に残る「炭鉱の記憶」を「再生」することを通じ、現在の住民の生活の質を漸次的に向上させ、未来にまちの誇りを伝えていき、最終的には「地域が元気になる＝地域再生」を目標とする。それは清水沢地区においては、地域住民が外部からの多くのファンと共に日常的に活動し、経済的・文化的に生活がうるおっている状態を指す。

#### コンセプト

この計画の最大のコンセプトは、「石炭の歴史村」との対抗軸を打ち出し、住民たちが主体となり地域に埋もれているものを掘り起こす、夕張観光の新しいスタンダードとして提示することである。

このコンセプトのもとに、具体的な指針が導き出される。

- 石炭にまつわる地域のストーリーを解きほぐす。
- 外部と地域住民との交流を引き起こすスイッチとなる。
- 住民と外部の参加者が交流することで作り上げられていくプロセスにも価値を求める。

#### 計画期間

空知支庁の長期計画との整合性、炭鉱閉山からの時間経過、地域住民の人口減少と高齢化などの理由により、計画期間は、2009(平成21)から2019(平成31)年までの10年間が妥当であると考えられる。

### (2) エコミュージアムの構成

#### テーマ

タウンウォッチングで選定された地域資源を整理し、清水沢地区の形成に関連する、石炭を頂点とした「3つのテーマ」に集約された。これは、エコミュージアムのサテライトや発見の小径の集合体という位置づけである。

●「炭鉱のテーマ」石炭と電気のダイナミックな流れをトレイルで結ぶ。

●「繁華街のテーマ」外部との玄関口としての繁栄の面影を伝える。

●「炭鉱住宅のテーマ」炭鉱住宅の多様性と濃密な炭鉱住宅でのコミュニティを描く。

テーマに求められる機能は、地域住民や来訪者が現地で直接地域資源に接することで、現在の清水沢地区の

姿を形成したストーリーを体感できるようにすることである。また、各テーマのシンボルとしての役割を持つ、テーマセンター(各テーマにおける中核施設)を設置し、テーマ内を説明する展示だけではなく、そこを活動拠点とし地域住民との交流を通じて、各テーマの理解を促す。

### テリトリー

石炭を頂点とする3つのテーマの展開範囲をテリトリーとする。

### センター(中核施設)

3つのテーマを結節する地点に、エコミュージアムの中核施設(センター)を設置し、地域を貫く石炭と各テーマとの関連性の解説等を行う。

センターは、外部からの来訪者に対してはワンストップ的なビジター施設として、地域住民に対しては活動の統括的な拠点として利用される。また研究・広報・情報・教育・サービスなどの役割や事務局機能もセンターで担う。

以上を踏まえた、清水沢エコミュージアムの展開図を図6に、空間的に構成する諸要素の概念を図7に示す。

清水沢エコミュージアムのセンターと各テーマには、独立した機能を持たせるものの、石炭を頂点とした関連性において、「炭鉱のテーマ」→「炭鉱住宅のテーマ」という来訪者の一定方向の動線が想定されている。来訪者は地域住民そのものが地域資源であることに気づき、徐々に地域のファンになっていくことで、来訪者と地域住民による次の展開の素地となる潜在的な機能を備えている。

なお、センターは外部へ開かれているものの、むしろ、地域住民との交流を指向しないマス・ツーリストが、生活の場である炭鉱住宅街に直接流入しないための砦としての機能も持っている。

### (3)「炭鉱の記憶」再生機能

それぞれの「テーマ」にて、どのように「炭鉱の記憶」の「再生」に取り組むかについて、3つの機能を設定した。

- 記憶の再生(Research)生活や技術の記憶を後世に残すために掘り起こすこと。エコミュージアム活動の基礎的作業。例:聞き取り調査、資料収集、タウンウォッチング等

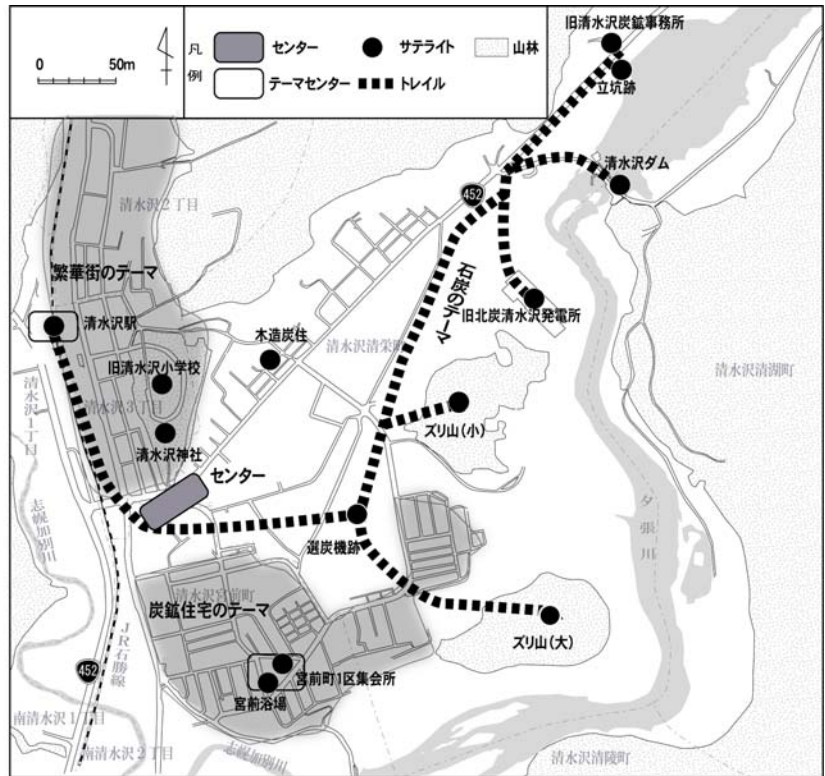


図6 清水沢エコミュージアム展開図

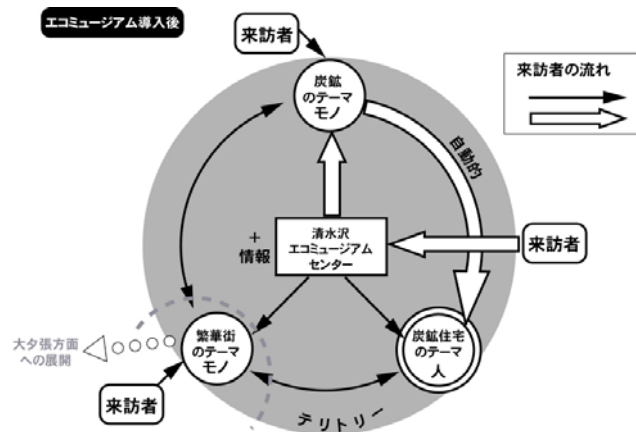


図7 清水沢エコミュージアムの概念図

●過去の姿の再生(Recall)現存していないかつての地域の姿を生き生きと想起できるように、異なるメディアで具現化すること。例:写真展示、模型作成、痕跡の保存等

●資源の再生(Reuse)現存しているが活用されていない資源を本来の意味・価値で再利用、もしくは今日的な新たな価値を付与して活性化すること。(現代的目的への転用(Renovate)も含む)例:スリ山登山道の設置、遺産の保存活動、空き家(現住も含め)炭住の公開、技術の活用等

これらの「再生」の関連性を示したのが図8である。これらの活動が集積した結果、「地域の再生(Revitalization)衰退する地域を元気にすること」が達成される。これら清水沢エコミュージアムで図られる「再生」を総称して「4つ

の再生」とする。

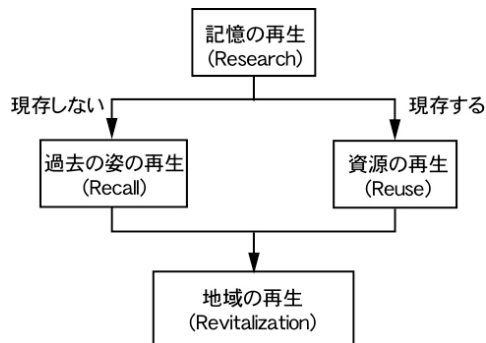


図8 「4つの再生」の関係

#### (4)実現までのプロセス

清水沢エコミュージアムは、清水沢地区に知的関心を寄せる外部の人々が、積極的に地域に関わることから起動し、段階的に発展させていくことを想定している。ただし外部の人々が一方的に押し寄せることがないよう、地域内外を繋ぐ役割を担う組織が介入し、調整を図る必要がある。初期段階における、ある程度の学術性・専門性を担保した研究機能を含むエコミュージアムの運営は、広域 NPO などにより進められる。エコミュージアムにより、外部の人々が住民とのつながりを深めていくうちに、住民の間にも地域資源を活用したまちづくりの機運が高まり、将来的には地域住民と外部のファンがパートナーとして共に運営することを目指す。

本構想は、エコミュージアムとしての要件を具備しており、これまで夕張市において行われていた観光の対極に位置づけられ、すでに現実社会にて萌芽しつつある、地域内外の人々の双方向的な交流を題材としていることから、具体化の意義および実現可能性を有する。

## 7. 結論

以上を踏まえて本論文の結論を示す。

夕張市では、疲弊した地域の再生に寄与する観光のあり方として、地域資源の価値を最大限に高めることが可能となるエコミュージアムを、観光まちづくりの手法として導入する意義が十分にあると言える。本論文で得られた、疲弊地域の観光に必要な要素は、

- 1 地域の歴史的な文脈に位置づけられる地域資源を、地域内外の人々の協働により活用すること
- 2 地域内外の人々の意識変化を引き起こす可能性がある「双方向的交流」により、住民の主体性を高めること
- 3 地域に対する一定の素養を持ち合わせる来訪者の存在。また、それを補うため、来訪者に教育や情報を提供する機能

である。これらはエコミュージアムの持つ「地域資源の現地保存」「住民主体」「博物館」という3つの特徴に合致し、エコミュージアムでしか捉えることができないものである。また、過去の夕張観光の反省に立っても妥当性がある内容であり、観光まちづくりを実現するために、広く一般的な地域で活用できる知見であると言える。

これらを考慮して構想した「清水沢エコミュージアム」で「炭鉱の記憶」の再生に取り組むことにより、住民が地域での生活に生きがいとやりがいを見出すことで、経済的・文化的なうらおいが生まれ、最終的に地域再生に結実する。

今後の研究課題としては、疲弊地域の再生に寄与する観光の手法について、体系化を図る必要がある。夕張市の観光まちづくりでは、炭鉱遺産以外の地域資源を組み合わせた検討を行っていく必要がある。また、最低限の生活の維持すら危機的な集落において、外部との交流を核に、安心・安全な暮らしづくりをどのように行うか、検討されなければならない。さらに、清水沢エコミュージアム構想では、広域ネットワーク化の可能性の検討などが、引き続き行われるべきである。

#### 【注釈】

<sup>1</sup> エコミュージアムは、1970年頃に、フランスの博物館学者、リヴィエール(Georges Henri Rivière)によって考案された。活動の主体となるのは地域住民であり、地域における価値を来訪者に提示する。その一般的な構造は、博物館の「研究・保存・活用」機能を展開する中核施設である「コア」、地域に残る歴史的遺産などを現地の空間の中で保存する「サテライト」、それらを結び散策路である「ディスカバリー・トレイル(発見の小径)」などから形成される。

<sup>2</sup> 清水沢地区は、夕張川と志幌加別川の合流点となる夕張市の中部に位置しており、夕張本町方面と鹿島・南部(大夕張)方面との鉄道・道路の分岐点であった。北炭は1926年に清水沢発電所、1940年には清水沢ダムを設置、1947年に北炭清水沢炭を開設した。その後、1970年代に入ると、三菱南大夕張炭が南部地区に、清陵町には北炭夕張新炭が開設したことで、市街地は繁栄したが、1990年までにいずれも閉山し、大夕張鉄道も廃止された。さらに1991年には清水沢電力所も廃止され、炭鉱関連機能は消滅した。しかし、隆北地区に比べ炭鉱閉山が遅く、炭鉱跡地が観光事業に転用されることがなかったため、炭鉱閉山後もコンクリートブロック造りの良質な炭鉱住宅が市営住宅に移管されたことから、炭鉱時代から引き続き居住する住民が多く、人口は2,668人(2008年8月末現在)であり、夕張市内でも最大の人口を有する地区である。

<sup>3</sup> NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団ならびに北海道空知支庁の共催。夕張市内在住者・在勤者(以下、《市内》)12名(4グループ)、夕張市外からの参加者(以下、《外部》)のうち、一般の参加者(以下、《市外》)14名(5グループ)、そらち事業の空知産炭地域広域景観調査会議に所属している参加者(以下、《専門家》)5名(2グループ)であった。また、終了後にワークショップを行い、まとめ作業ならびにグループごとに「清水沢地区の誇れるものベスト3」の選択を行った。筆者は、タウンウォッチングならびにオープンハウスにおいて、参与観察および効果測定調査を行う機会を与えられた。

<sup>4</sup> 奥・深田(2003)によると、「カメラをある空間の利用者に貸与し、一定のテーマで撮影した後に回収して、撮影された写真を分析することにより、人々に認識された環境の特性を明らかにする調査方法」である。写真を

撮影するという行動により、地域資源を発見するという目的をより明確化させ、また一枚の写真には膨大な情報が含まれるため、参加者の調査協力への負担を最小限に抑えることができることなどから採用した。

<sup>5</sup> タウンウォッチングで選定した地域資源の中から、撮影枚数が多いものを中心に14資源を抜粋し、5段階評価とコメントを求めた。

<sup>6</sup> 有効撮影枚数899枚について中心に写っているものを判読し、場所・固有名・説明部分などを省いた上で、類似性の高いものを集約した。以下【分野名】、【資源名】のように表記する。

<sup>7</sup> NPO法人炭鉱の記憶推進事業団ならびに北海道空知支庁の共催。各自で住宅を訪問し、住宅の見学のほか、生活のようすや炭鉱時代の生活状況などを居住者と対話する形式で、80名の参加(市内7名・市外73名/男性46名・女性27名)があった。参加費用は500円。

<sup>8</sup> アンケート票は空知支庁が作成し、本論文ではそのデータ提供を受け、独自の分析を行った。回答総数は51通(男性24名・女性20名、市内3名・道内46名、道外2名)回収率は64%。

<sup>9</sup> 居住者への事前インタビューは2008年10月7日(火)・14日(火)の2日間、事後インタビューは2008年10月20日(月)に、各居住者の自宅にて45分～1時間ほど行った。

<sup>10</sup> 「構造構成的質的研究法(Structure-Construction Qualitative Research Method:SCQRM)」は、西條が体系化した質的研究のメタ理論である。インタビュー内容から、発言者が意図する概念を抽出・整理し、理論モデルを作成する。インタビューなどの質的データの分析の際、解釈の根拠を示しながら、解釈を導き出すプロセスを示すことで、反証可能性を残す。

## 【参考文献・URL】

Peter E.Murphy(1985)「Tourism- A community approach」(ピーター E.マーフィー、大橋泰二訳(1996)『観光のコミュニティ・アプローチ』青山社)  
Georges Henri Rivière(1980)「Définition évolutive de l' écomusée」Museum No.148,Unesco.

新井重三(1995)『実践 エコミュージアム入門』牧野出版.

大原一興(1999)『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会.

奥敬一・深町加津枝(2003)「森林レクリエーション行動下における景観体験の生起パターン」,日本林學會誌 85(1),pp.63-69.

観光まちづくり研究会編(2000)『観光まちづくりガイドブック』財団法人アジア太平洋観光交流センター <http://www.aptec.or.jp/Guidebook.pdf>(最終確認 2009年1月29日)

西條剛央(2007)『ライブ講義・質的研究とは何か (SCQRM ベーシック編)』新曜社xxx.

斎藤亮司・藍澤宏・北島千寿(2001)「農村集落における住民の居住環境評価からみた地域資源認識に関する研究」,農村計画論文集第3集 pp.1-6.

佐藤真奈美・吉岡宏高(2008)「地域資源としての炭鉱遺産の評価に関する考察-夕張市清水沢地区でのタウンウォッチングを事例に」日本観光研究学会全国大会学術論文集 23,pp1-4.

丹青研究所(2003)『ECOMUSEUM-エコミュージアムの理念と海外事例報告-(第6刷)』丹青研究所.

北海道空知支庁(2008)「元氣そらち！産炭地域活性化促進事業中間報告書」.

吉岡宏高(2005)『炭鉱遺産でまちづくり-幌内炭鉱の遺産を主題にした「場」のマネジメント-』富士コンテム.